

水道水に代わるもの

学習院中等科三年中組

小林 こばやし 花 はな

五年前の九月、私のいところ家族が住む茨城県常総市は線状降水帯による大雨により、河川が氾濫し、街が水に浸かった。水が引けるのを待ち、復旧に向かうも、電気も水道も止まっており、見渡す限りの流れ着いた瓦礫とへドロの匂いの中で、立ち尽くした。水を確認しないことには進まないな……。数日前ま

で街を飲み込んでいたのは水なのに、皮肉だなと思った。が、水道から流れるようにきれいな水でなければ、このゴミと汚水は流せない。まだ残暑の残る九月。作業中の飲み水も確保する必要があった。私の家は隣町だったが被害は無かったため、親せきに声をかけ、大きなタンクに大量の井戸水、水道水を確保し軽トラックで災害現場に運び、復旧作業を行った。しかし、普段蛇口をひねれば水が出てくる生活が当たり前の生活。それがどれだ

けありがたいことなのか、また、水を無駄にせず使う大切さをこの時ほど強く感じたことは無かった。バケツでの復旧作業も大変だったが、トイレに行こうと思っても、少し手を洗おうと思っても、そこに水はない。作業で汚れたバケツをまず洗い、その水も無駄にせず、作業に使った。さらに手を洗いその水をトイレに運んで用をたし、流した。作業をしてくれている人達みんなで限りある水を大切に使い、普段いかに便利に水を使っているかを実感していた。

昨年十月、過去最強クラスの台風十九号が関東地方にも甚大な被害をもたらした。私の住まいからも河川が近く、またすぐ下流には浄水場がある。窓の外は暴風雨。母は、ニコラスとインターネットの河川水位情報を常にチェックしていた。河川の氾濫はもちろん、浄水場に浸水の危険が及ぶ可能性もあったからだ。浄水場が浸水してしまつたら水道の機能が麻痺する。私たちは万々に備え、水を貯

めることにした。空のペットボトルや水筒、鍋にも飲料用の水を確保した。バケツ、浴槽にトイレ用の水。しかしこの程度が限界だった。この量では万一水道が止まったら、持つて一晩。急に怖くなった。外はまだ強い風と雨。車で避難場所に向かうのも危険だ。水道水に代わるもの：と考えるても考え付かない。それほど水道水は私たちと切っても切り離せないものであり、安定して安心・安全な水の供給があることは、私たちの生活の基盤となり今の社会を支えてくれているのだ。幸い、昨年の台風での被害はなかったが、母は確保した水を使って料理をし、洗濯を始めた。蛇口をひねれば水が出る。この当たり前を続けるために、限りある資源を大切にしたいのだ。災害は避けられない。しかしそれを想定して日ごろから水を大切にすることはできる。水道水がどこでも便利に使えるようになった。今、これからは代わるものがない大切な資源を守っていく時代になったのかも思えない。

万に備え、日ごろより節水を心がければ、非常事態にも慌てず対処でき、また、十分な貯えのある所から被害のあった地域への対応もできる。他に代わるもののない資源「水」。この無くてはならない水を安心していつでも清潔な状態で使うことのできる水道の役割。私は今一度、それを見直し、私にも水道を、水を守るためにできることを考えたいと思う。